
かわいいひと

伊達倭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
かわいいひと

【Nコード】
N9504B

【作者名】
伊達倭

【あらすじ】
ある日、校内きつての不良少女と噂の、不動マコに呼び出された主人公。怯えながらも、約束の体育館裏に赴くのだが……

朝、登校すると、僕の下駄箱に一通の手紙が入っていた。

さてはラブレターかと内心小躍りしながら開けると、そこには「今日の放課後、体育館裏で待つ」とだけ書きなぐられた一枚の白い紙が入っていた。綺麗な便箋とは裏腹の、戦慄させる一文である。

さらにあるうことか、御丁寧にも差出人の名前まで書かれていた。不動マコ。昨今では珍しい、所謂一昔前のスケバンと言われるスタイルを地でいく女子だ。流行とは正反対のロングスカートと、腰まではあるうかという長い髪。いつも何かを睨んでいるかのような、鋭い目。先生方も、怖くて中々注意できないと噂の、校内きつてのアウトローとして名高い御方である。

そんな彼女がどうして僕にこんな物騒な手紙を寄越したのか。

格好が格好なので、見かけることはよくあるが、いくら記憶を掘り返してみても、喋ったことはおろか、彼女に近づいたことさえない。無論、彼女のお仲間の連中と揉め事を起こしたとか、恨まれるようなことをしたとか、そういった事実も一切もない。下駄箱を間違えたのかとも思ったのだが、我が高校は律儀にも下駄箱には名前が書かれている。手紙の入っていた下駄箱にも楠木惣一郎と、しっかりと僕の名前が書かれていた。これで間違えるとしたら、彼女は字が読めないということになる。流石にそれはありえないだろう。

逃げ出すと余計怖い思いをしそうなので、取り敢えず教室に行き、授業を受ける。もっとも、授業などろくに耳に届きはしない。一体自分が何をやらかしてしまったのだらうと、そのことをずっと考えていた。

そしてそれは、昼休みまでずっと続く。

「楠木。どうしたんだ、食欲がないね」

一緒に弁当をつづいていた高木という友達が、あまり減っていな

い僕の弁当箱を覗いて、少し心配そうに喋りかけてきた。眼鏡をかけた、ひよろりと細長い、地味な男だが、人の心の機微にはけっこう敏感だったりする。

高木の隣で弁当をつづいていた仁科という友達も「どうかしたのか」と尋ねてくる。仁科は僕や高木と違って地味ではないが、お人好しで、多少口は悪いが、誰からも好感の持たれる素でいいヤツだ。「顔色もよくない。気分でも悪いのかい？」

「いや、ちよつと考え事を」

高木の質問に、はぐらかすように答えた。高木はふむ、と呟いて、僕の顔を真正面から見た。急に、全てを見透かされているような気分になる。

「そついえば、朝から元気がなかったね。相談に乗ろうか？」

どこか台詞がかつた口調で言う。仁科も「俺らでよけりやな」と付け加えてくれる。どうしようかと迷ったが、このまま放課後を迎えるのも怖い。高木も仁科も信頼できる友達なので、腹を割って全部喋ることにした。

「というわけ。恨みを買ってるとも思えないし、どうしていいのか、全然わかんなくてさ」

これまでの経緯をかいつまんで説明する。二人を見ると、高木は腕を組んで、仁科は頭をぼりぼりと掻いて神妙な顔をしている。

「ど、どうしたらいいかな？」

二人の様子が僕の不安を膨らませる。やはり、これは所謂「オトシマエ」とかいうものをつけるための呼び出しの手紙なのだろうか。「不動マコ、か。あんまりいい噂は聞かないよな」

仁科が追い討ちをかけるような一言を呟く。

「仁科。怖がらせてどうする。大体、噂なんて大抵尾ひれがつくものだ」

高木が苦笑して仁科を諭す。こういうとき、高木は弁舌になる。

「けどよ、実際先生とか、不動に注意とかしてねえし」

「そりゃしないだろうさ。校則ではスカートは膝下15cm以下と

定められているだけで、それ以下は駄目とは一言も書かれていない。髪も染めているわけではないからね。それに何より、別に誰に迷惑をかけているわけでもないだろう。授業をサボったりしているわけでもないようだし」

「それでも、あのカツコ、流石に普通は咎められるって」

「まあ、普通ならね」

高木はそこで言葉を止めて、意味深に微笑んで仁科を見た。

「焦らすなって」

「はいはい。不動さんはね、成績がいいんだよ。少なくとも、僕達よりはるかに」

僕は、大体どの教科も平均点より多少上の、所謂褒められも責められもしない位置にある。それは高木や仁科も同じことで、教科の得意不得意こそあれど、似たようなものだ。

「生徒指導の先生がばやいてたよ。成績がいいし、別に何かしているわけでもない。服装も校則に反してはいない。これと言って、注意しなくていいのに、注意しないといけない気がするんだよね、って」

高木が苦笑交じりに付け加えた。まあ、いくら校則を破っていないとはいえども、先生の注意しないといけないという気持ちは、わからなくもない。まあ、僕としては、不動さんの成績やら、先生の言動よりも、高木が何故そんなに詳しいのか、そっちのほうが疑問であるが。それは仁科も同じだったらしく、「なんでそんなこと知ってるんだ」と尋ねたら、高木は実にそっけなく、去年同じクラスだったから、と答えた。それだけでは説明のつかないところもあるのだが、仁科は納得したようだ。僕も敢えて深くは聞こうとはしなかった。

「それで結局、どうしたらいいんだろう？」

思い切り脱線していた話を元に戻す。高木は「そうだね」と前置きしてから、

「先生が口出しできないのはさっきも言ったとおりの理由だけど、

彼女の噂はそれだけではないからなあ」

「そっぴゃ、腕っぷしは強いらしいな。並みの男より全然強いらしいぞ」

仁科の言葉に背筋が寒くなる。男より強いってことは、男と喧嘩でもしないとわからないのだ。いくら成績優秀、規則に忠実（かど）うか、疑わしいが）だとしても、喧嘩しているのなら、やはり不良ではないだろうか。

「まあ、あれこれ考えても仕方ないよ。ただの悪戯かもしれないし。取り敢えず、行くしかないのだろうし」

「そっぴゃな。それに、俺たちもこっさり近くに隠れとく。もし殴りかかってきたら、大声出せよ。加勢してやる」

「う、うん……そっぴゃね」

まあ、どのみち行かないといけないと思っていたのだし、この二人が近くに居てくれるなら、多少は安心だ。ここまでくれば、もう何をしても同じだと自分に言い聞かせ、僕は止まっていた箸を動かし始めた。

午後の授業は、一応頭には入った。まだまだ不安は消えないが、高木の言ったとおり、考えても仕方のないことなのだ。できればただの悪戯でありますようにと祈りながら、妙に短く感じた今日の授業を終えた。

「それじゃあ、行ってくるよ」

「おう、俺達もすぐ行く。危ないと思ったらちゃんと叫べよ」

「うん。そのときはよろしく」

僕は仁科と高木をそれぞれちらりと見て教室を出た。

階段を降りて、一応靴を替えて。手紙にあったとおり体育館の裏に向かう。今まで一度も来たことのない場所だ。雑草が所々に生えているが、陰湿というイメージはない。けっこう広く、喧嘩には差支えがなさそうだ。

「……さて」

朱に染まつた空を一瞥して、雑草を踏みしみて、歩を進める。今更ではあるけれど、緊張してきた。今まで聞いていた噂とは少し違うようだが、あのスケバンのようなスタイルと射抜くような鋭い目の印象は薄れない。もしも本当にオトシマエとやらをつけられるのであれば、並の男（もしくはそれ以下）である僕は手も足も出ないことだろう。

「……やだなあ」

殴り合いの喧嘩なんて、生まれてこのかたしたことがない。ましてや相手は女の子である。勝っても負けても、世間の風は冷たいことだろう。もしも子分みたいのがいっぱいいてきたら、仁科や高木が駆けつけてくれてもどうしようもないのではないのだろうか。彼らまで巻き添えにしてしまうのは、流石に申し訳ない。

やっぱり、帰ろうか。

心が揺らぎかけた、ちょうどそのときだった。

「楠木 君」

「はいっ!？」

背中から声がした。ちょっと低めの、女の子の声。弱気になっていた心が上ずった声で返事をさせた。

恐る恐る振り向くと、件の女子、不動マコがこっちに睨みをきかせて歩いてきていた。一步踏み出すたびに左右にたなびく、黒く長い髪。足首まではあろうかという長いスカート。僕と同じくらいはあるのではないだろうか、すらりとした上背。教師さえも畏怖させるといふ、鋭い眼光。整っているが故に一層怖い表情。ドラマで見えるならば、かつこいいとも思ったのだろうが、その強烈とも形容できる眼差しの先が、紛れもない僕自身となれば話は別だ。

「来てくれて嬉しい」

「は、はあ」

ぼそりと呟かれた言葉は、額面どおり受け取るなら、歓迎の挨拶だった。しかし、どう考えても睨まれているし、喜んでいるようには見えない。それとも、オトシマエをつけることが出来て嬉しい、

ということなのだろうか。それはあまりにもいただけない。

不動マコはさらに踏み出し、とうとう僕との距離は3メートルというところまでに迫った。射程範囲内である。

「ま、まあ、大体用件はわかっているだろうが」

こほん、と咳払いをして彼女は僕から目を逸らせた。わかっているだろうが、という一言が僕を震え上がらせる。やっぱり、どこかで恨みでも買ってしまったのだろうか。

「あ、あの……ぼ、僕は……」

「いい、何も言うな」

最早、弁解も謝罪も許されないらしい。せめて、自分が何をしてしまったのかぐらい知りたかったのだが。

また一步、彼女が距離を詰める。僕は思わず一步下がる。すると彼女は不機嫌そうに僕を一瞥して、「動くな」と苛立つように言った。発言権に続いて行動権をも奪われてしまったらしい。

「これでも緊張している。楠木……君も我慢して欲しい」

はい、と答えようと思ったが、喋ってはいけないことを思い出して、頷くだけにとどめた。動いてもいけないのだが、これくらいは許してもらえたようだ。彼女は満足げに頷いて、さらに近づいてきた。とうとう、その距離は2メートルをきった。額からは冷え切った汗が流れ、膝がかすかに震えている。たとえ殴られようと相手は女の子。そんなふうと考えていたのだが、実際その場面に立たされると、実に甘い憶測だったことがわかった。

「単刀直入に言うぞ。一回しか言わないからな」

拳をぐっと握り、真正面から僕の顔を睨みつけて、不動マコは宣言する。罪状を言い渡すつもりだろうか。スタイルが地でスケバンだけある。方式もそれに則っているのだろうか。否、スケバンの方式なんて知らないのだけれど。

それにしてもすごい気合の入りようである。握られた拳は怒りの所為か、わなわなと震え、視線はそれだけで僕という存在を消し去ってしまいそうな気迫が籠っている。さては僕のしたことを言った

後、即刻ぶちのめす算段をしているのだ。見ると、彼女の顔は真っ赤である。怒りが頂点に達している良い証拠である。仇敵を目前にして敢えて罪を宣告しなければならぬ、そのもどかしさに怒りを必死で堪えているのだろう。一体僕が何をしでかしてしまったのか、そこが全然わからないが、彼女をここまで怒り狂わせたのは事実なのだ。知らない、では済まされないのだろう。僕も、覚悟を決めなくてはならない。

大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐く。そして、彼女と同様に、真っ直ぐと相手を見て「わかった」と一言だけ、はっきりと答えた。発言は禁止されているが、これは受け入れられる気がした。

思ったとおり、彼女は何も言わずに、僕と同じように深呼吸をして、こくりと頷いた。そして

「好きだ!!」

台詞を間違えた。

「付き合ってくれないか!？」

また間違えた。怒りすぎて錯乱したのだろうか。僕はどう受け答えしていいのかわからず、ぼつとするばかりである。

彼女はぎゅっと目を瞑り、身体を小刻みに震わせている。顔どころか、耳まで真っ赤である。やはり、混乱しているのだ。

「あ、あのですね」

「な、なんだ？」

「ま、間違えて……ませんか？」

僕だつて覚悟を決めたのだ。このまま終わられても、ちょっと困る。せめて一発でも殴られたほうがつきりするといふものだ。

「わ、私は別に何も間違えていないぞ。正真正銘、楠木総一郎に告白したぞ!」

不動マコは今、なんと叫んだか。

楠木惣一郎に、告白したと言った。

つまりこの僕に、彼女は好きだと、愛の告白をしたというのか。

「もしかして……間違えていたのは、僕ですか？」

「どこをどう間違えたかわからないが、そうじゃないのか？」
どうやら彼女も、この僕の態度には意表を突かれたらしい。というか、僕も意表を突かれた。考えてみれば、彼女の仕草はどこも告白としておかしいものではなかった。

怒りにではなく、目の前に想い人をしたことにより頬を赤らめていたのなら。

告白する勇気を搾り出すために、拳を握っていたのなら。

来てくれて嬉しいと言ったのは、素直な、額面どおりの意味であつたのなら。

鋭い眼光は、睨んでいたのではなく、単純に吊り目だったとしたら。

台詞を間違えたのでなければ。

「……………」
「……………」

おそらく二人ともが予期せぬ展開に、沈黙が辺りを支配した。まさか、不良少女として有名な女の子が、体育館裏に呼び出して告白するとは思わないうし、彼女にしてみれば、想い人がオトシマエをつけられると勘違いしようなどと、夢にも思わなかったのだろう。冗談のような話ではあるが、ありえない話ではない。

「ま、まあ……間違いは、誰にでもある」

僕より先に現状を把握できたらしい不動マコが、少し疲れたように呟いた。

「それよりもだな、その……返事が聞きたいのだが」

「え、あ、は、はい……返事、ですよね」

告白されたのだった。返事をしなくてはいけなかった。

しかし、頭が追いつかない。告白されたことなんて一度もないし、ましてや女の子と付き合ったことなんてあるはずがない。順当に地味な男街道を歩いてきたのが僕である。好きと言われて嬉しくないはずはない。それは、確かに目の前にいるのは悪名高いスケバンではあるが、実際に会って、話をしてみると、普通の女の子だ。否、むしろ顔を真っ赤にして告白するなんて、可愛いらしいとさえ感じ

る。

「か、覚悟はできているぞ。いやならいやと、はっきり言ってくれ
！」

「い、いや……」

「……」

「あああつ、違います！そういう意味じゃないです！」

ものすごくショックを受けた顔をされて、思わず僕は必死になつて弁解した。彼女はすぐに立ち直ったらしく、「紛らわしい！」と喚くように言った。確かに今は紛らわしかった。

「そ、そのですね。わからないんですよ。なんで不動さんが僕に……」

「好きだからに決まってるだろう！」

再び顔を真っ赤にして彼女は怒鳴る。さっきまでは、あんなに怖かった彼女の視線が、今では可愛らしく感じてしまふから不思議だ。でも、今度は彼女が意味を勘違いしたようだ。

「いえ、なんでその……僕を好きに？」

「あ、ああ。それは……その、なんというか。あるだろう、気がつけば……その、好きになつていたというヤツだ。去年、楠木が……いや、楠木君が」

「楠木でいいですよ」

「あ、ああ。楠木は去年、よくウチのクラスに来ただろう。友達に会いに」

そう言われてみれば、確かに中学時代から付き合いのある高木に会いに、昼休みなどに遊びに行っていたような記憶がある。

「そのときにだな、偶然……笑っている顔を見たのだ。それで……」

「わ、笑っている顔、ですか？」

「も、文句があるか？！！？」

よほど恥ずかしいのだろう。ふいつと顔を横に向けて彼女は黙ってしまった。

けど、まあ笑っている顔というのはわかる気がする。笑顔を見る

と、誰だつて良い気分になるものだ。何気ない仕草に心が奪われたことは、僕にも経験がある。

「と、兎に角。返事を……早く聞かせてくれ。心臓が爆発でもしそうだ」

「は、はい。わかりました」

本当に不動マコは今にも倒れそうだ。見た目とは裏腹に、内心はけっこうナイーブに出来ているらしい。そんなところも含めて、可愛いと思う。だから、

「えっと……僕は、今まで、不動さんのこと、怖い人だなんて思ってた。さつきまで、本当に怯えてました。けど、実際に話をしたら、可愛いなあって……す、好きとか、そういう感情はまだないんですけど、それでもよければ、付き合ってくださいませんか？」

僕は、正直に言つた。最後のところが、僕から告白したような感じになつてしまつたが、そんなことは気にしない。兎に角、本音を言つたのだ。

「わ、私でいいのか!？」

突然、不動マコは僕の肩を掴んで訴えるように質問してきた。

「え、ええ。不動さんがいいです」

ちよつとびびつたけど、努めて冷静に受け答えをする。

「この格好でもいいのか!？」

「不動さん、その格好けっこう似合ってますよ?」

「え……そ、そうかな……っじゃなくて、おかしいと思わないか!？」

「そりや変わってますけど、別に規則破つてないですし、好きならいいと思いますって」

「……目もキツイし、背も高すぎる……それでもいいんだな?」

「綺麗な目ですし、すらつとしてとってもいいです。全く問題ないです。可愛いですよ」

一体、彼女は付き合つてほしいのか、断つてほしいのか。だんだん判らなくなってきた。

彼女を見る。間近にある顔は、今までのような強い光は宿っていなかった。その代わりに、瞳いっぱい涙がたまっていた。

「っ……楠木い！」

「ぐあっ!？」

いきなり、不動マコが体当たり　否、抱きついてきた。僕の胸に顔をうずめて、堰を切ったように泣き出した。かなり強烈だったが、なんとか踏ん張って、彼女の背中を、軽く撫でてやった。

思うに、不動マコはずっと自分に自信が持てなかったのではないだろうか。

スケバンスタイルという、その格好の所為で、人が近づきにくくなってしまうたのだろう。人が自分を避ける姿を見てゆくうちに、自分という存在に自信が持てなくなった。そんな気がする。

「不動さん」

ようやく落ち着いた不動マコに、ゆっくりと話しかける。

「……マコ」

「……?」

「マコって呼んでほしい」

恥ずかしそうに、顔をうずめたまま彼女は呟いた。いきなり、ドクンと僕の心臓が胸打った。彼女の仕草が、どうしようもなく可愛く感じた。

「……わかりました」

「あと、敬語もいや」

「……わかった。それでさ、マコ、変なこと聞くんだけど、なんでその、スカートとか、そんなに長くしてるの?」
ずっと疑問だったことを聞いてみる。

「趣味だ」

「趣味ですか」

「駄目?」

「いや、いいんじゃないかな」

あんまりにも単純な理由に、脱力する。どうやら、この不動マコというのは、周りからのイメージとは全く違う方向で変な人らしい。「自分に一番似合うのは、こういうのだと思ってな」

「ま、まあ似合ってるけど」

確かに怖いぐらいに似合っている。けど、その所為で人から遠巻きにされているわけなのだから、いい似合い方ではない。

「不満か？」

マコはちよつと悲しそうな目で僕を見た。

「不満というか、勿体ないかな」

「勿体ない？」

「マコは多分、普通の格好でも全然似合うと思うよ」

背も高ければ顔もいい。むしろ似合わないもののほうが少ないのではないだろうか。

「色々、教えてくれ。楠木だけが頼りだ!!」

「う、うん。まあ、できる範囲でね」

まあ、世間知らずは追々直していけばいいだろう。

「じゃ、じゃあ早速服を見繕ってくれ！」

「え、今から？それに僕はあまりそういうのは得意じゃ……」

「何を言っている。楠木が一番似合うと思った服が一番に決まっている」

……こういうこと、言われるとけっこう照れてしまう。

「……じゃあ、いこっか」

「うん」

マコは頷くと、ゆっくりと身体を離して、ちよつと照れくさそうに微笑んだ。成る程、確かに笑顔というのは、人を魅せる。

「……手、繋ごうか」

笑って、僕は言った。するとマコは、心底嬉しそうににこりと笑って言った。

「うん、繋ぎたい」

こうして僕達は体育館の裏を後にした。

仲良く手を繋いだ、二つの長い影法師をその場所に残して。

（後書き）

拙作を読んで頂き、ありがとうございました。

本作は、数年前に執筆して、最近加筆修正したモノです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9504b/>

かわいいひと

2010年10月8日14時25分発行